

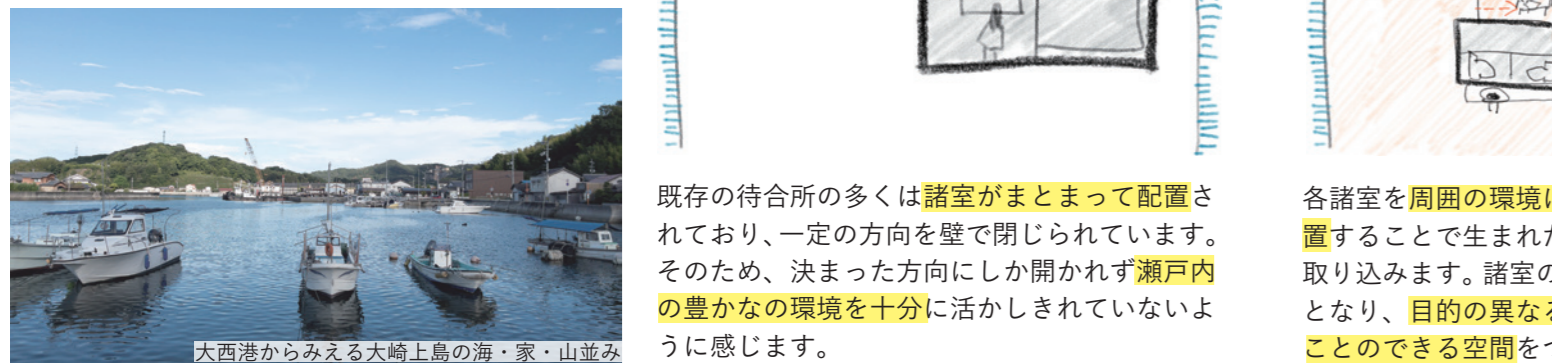
人と環境を迎え入れる、待合いどころ



これからの待合所のあり方について

「待合所」から、瀬戸内の豊かな環境全体で待つことのできる「待合いどころ」へ

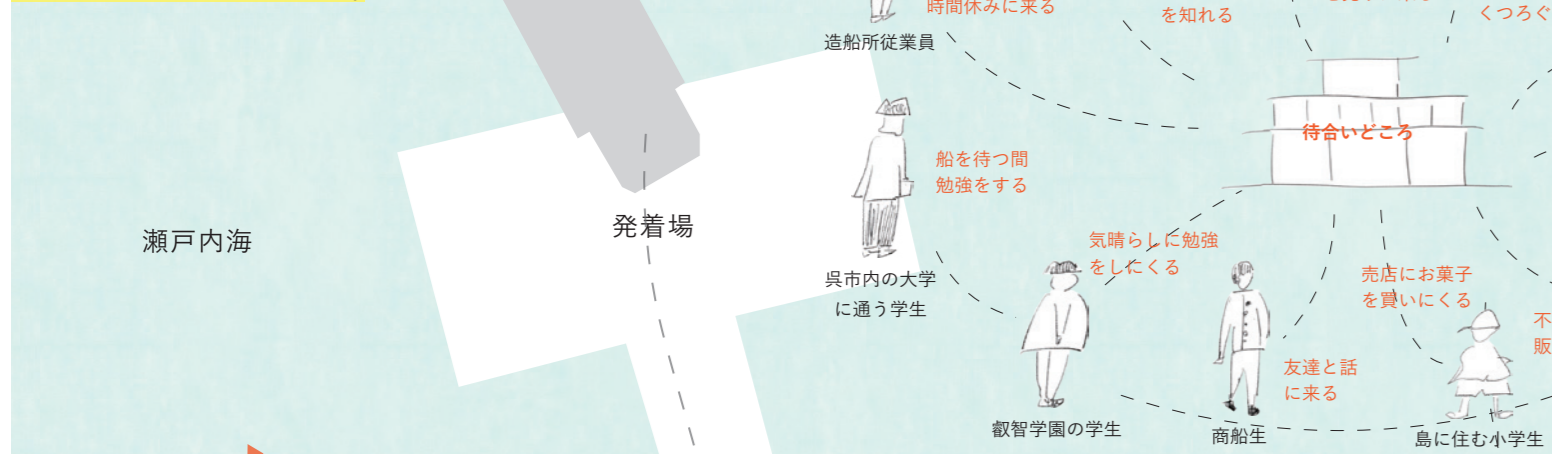
潮待ち・風待ちの街として、他者を「迎え入れる」
 ことで繁栄を遂げてきた瀬戸内海の島々。大西港のある大崎上島もその島の一つとして繁栄を遂げてきました。かつての潮待ち・風待ちといった単一的な目的から、通勤・通学や観光など、港を訪れる目的が次第に多様化してきました。そんな多様化した「待つ」を、緩やかな時間が流れる島のなかで、瀬戸内の豊かな環境と共に過ごすことのできる「ところ」を提案します。



これからの待合所のあり方について

ふらっと立ち寄ることができる、暮らしと旅に馴染む待合どころ

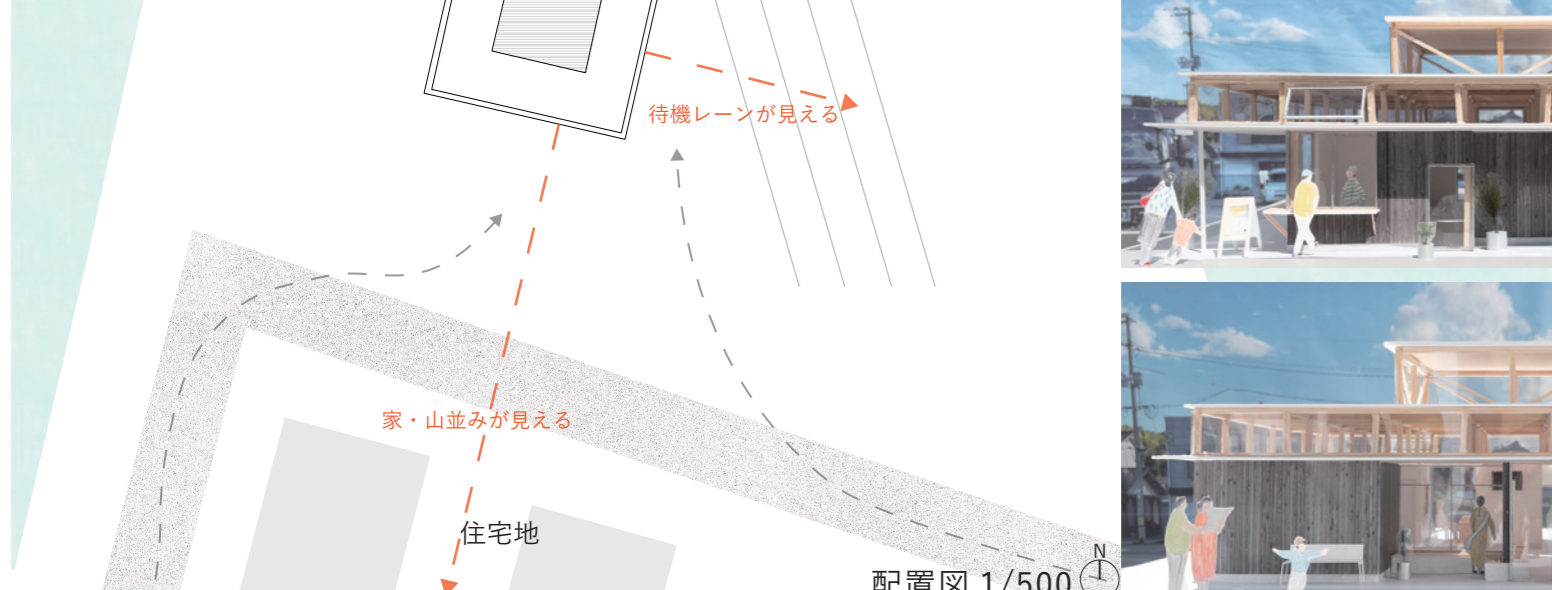
既存の待合所は閉じたような印象があり、利用者が限られる印象を受けました。船を待つ人だけではなく、島の住人や観光客がふらっと気軽に立ち寄ることのできるキオスクのような、ハレとケが融け込む建築とします。



立面計画

四周全てが「おもて」となる立面

3方向を海、1方向を集落という環境に対してすべての面が「おもて」となるように立面をつかっていきます。北側の海、西側の造船所、南側の集落の家並み、山並みといった大崎上島特有の風景を屋内の待合いどころから眺めることができます。また、建築の外形を正方形にすることでどの方向からでもわかりやすく、港全体のアイコンとなり、人々を向かい入れていきます。各方向の敷地条件から、壁をセットバックし、此の深さを調整していくことで、各立面ごとの居場所に微差が生まれていきます。



平面計画

多様化した「待つ」を迎え入れる平面

瀬戸内海の豊かな環境全体で「待つ」という行為を迎え入れる「ところ」を設けます。多様化した「待つ」という行為を、待合所という機能を超えた「待合いどころ」が受け皿となり、多様な人々が島に流れる緩やかな時間の中で、選択的に時間を過ごすことのできる空間をつくります。

海を眺めるところ

海に一番近い大きな軒下の空間。低く大きな軒は、瀬戸内の穏やかな海の水平線を強調し、風景を望むにいく。

販売できるところ

島の住人が育てた野菜や漁師の魚が並び、マーケットや朝市にも使える半屋外空間。外からも直接販売ができるようカウンターを設ける。

勉強できるところ

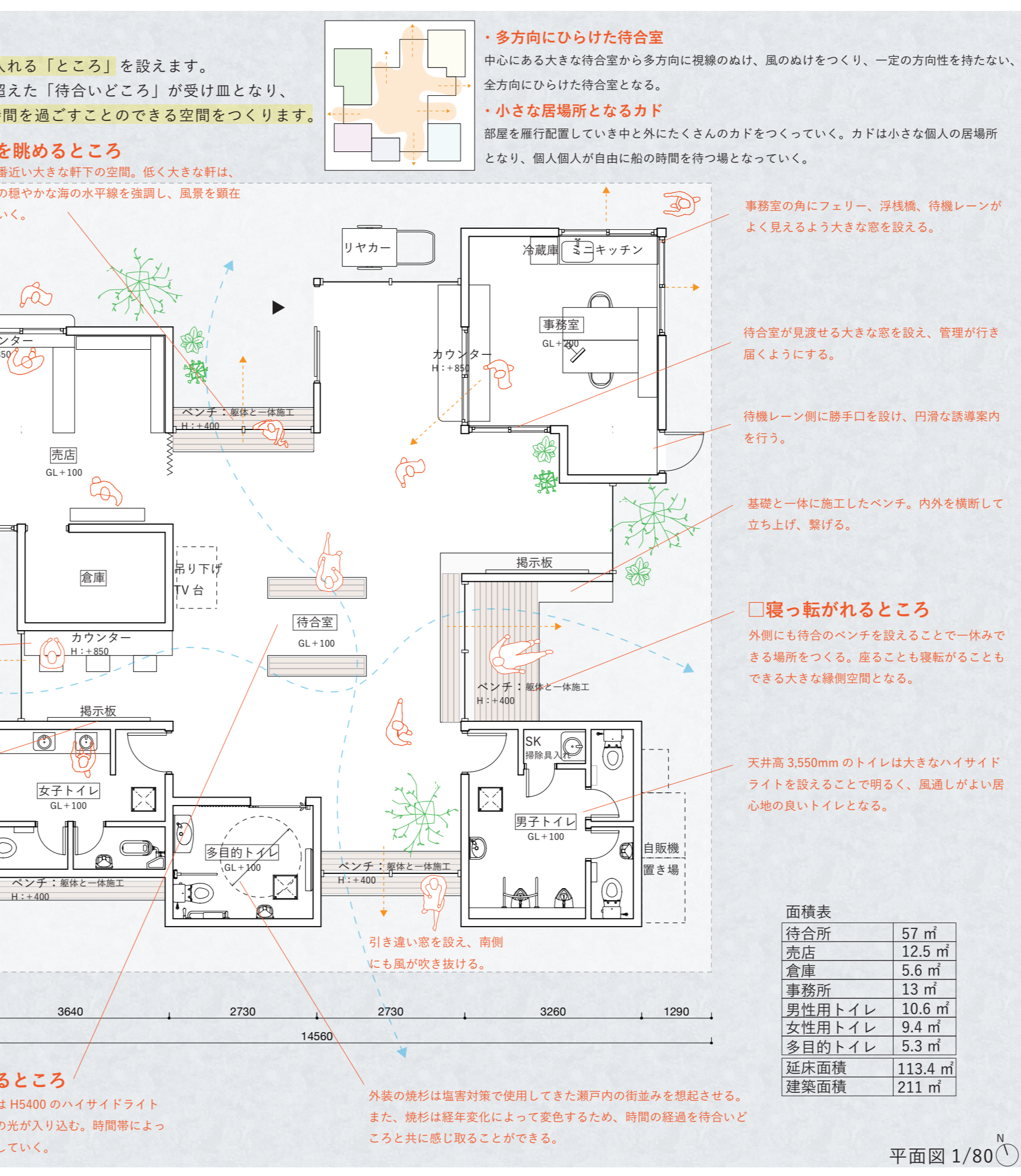
島に住む学生が船を待っている間にちょっとした宿題や仕事ができるデスク

座れるところ

外形を凸凹させ、小さなたまり場をつくる。建築に裏をつくらず人の居場所を生む。

空を見上げるところ

真ん中の大きな空間はH5400のハイスାଇドライトからたっぷり太陽の光が入り込む。時間帯によって空間の様相が変化していく。



ライフサイクルコストへの配慮

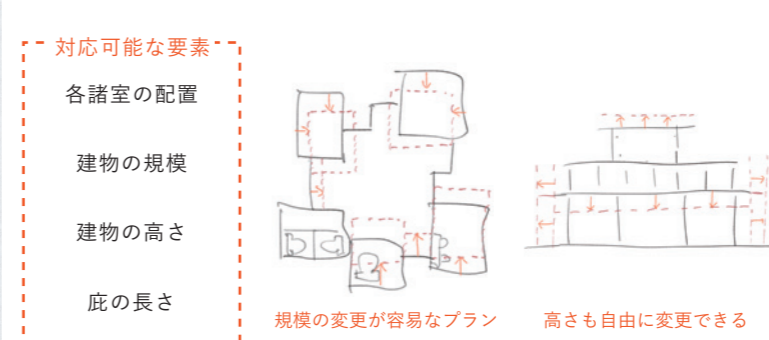
まちに愛され、長く残りのための木造

- つくるとき
 - ・木造とすることで杭工事等の関連工費を削減します。
 - ・建材には県産材を用いることで運搬にかかるコストを削減すると共に、広島に新たな経済の循環をつくります。
- 完成したあと
 - ・木造とすることで飯体の修繕費用を削減し、ランニングコストを抑制します。
 - ・高い耐久性を持つ外装材の焼杉は長い年月建物を護り続けてくれます。
- 建て替えるとき
 - ・木造解体は有機物を多く使用しているため他の構造物に比べ環境負荷が低くなります。
 - ・資源を再利用でき、資源の節約や廃棄物の削減に繋がります。
 - ・住民が気軽に参加できるマーケットで出た利益の一部を施設の維持管理費に回すことができます。

柔軟性のあるプランニング

みんなで考え、共につくりあげる

この待合所がまちに愛され、長く残り続けるために、住人をはじめとした利用者の方々、施工者、行政の方々たちと一緒に考えながらも共につくりあげていきます。そのために、在来構法の基本モジュールによる「諸室」と1,820mmスパンの「格子梁」「屋根」という単純な構成でつくられる建築は、設計段階での規模の縮小やそれに伴うプラン変更にも対応できます。また、規格材を用いた在来構法であるため、予算に応じた設計変更を容易に行うことができます。



周辺環境への配慮

島のシンボルとなる外観

瀬戸内海の島嶼における船の待合所は島の顔になり得ると考えます。島の景観を維持しながら、日常的に利用する島の住人や久しぶりに帰省する人、初めてやってくる観光客にとっても変わらず迎え入れてくれるような明るく、懐の深い建築を考えました。櫓側のように四周を取り巻く高さ2,500mmの庇は人々を迎え入れ、最高高さ5,400mmの屋根は少し離れた場所からでも認知でき、夜は海を照らす照明の役割も果たします。



周辺環境への配慮 / 効率的な維持管理への配慮

瀬戸内の風景に馴染む焼杉仕上げ

外装には焼杉を使用します。焼杉は瀬戸内海の島嶼部において古くから塩害対策のために外装材として用いられてきました。仕上げを焼杉にすることで瀬戸内の街並みを想起させるだけでなく、素材そのものはほとんど痛まないメンテナンス費用が抑えられ、仮に痛んでしまってもその部分だけ張り替えるメンテナンスが容易に行えます。また、焼杉は経年変化によって色味が変化するため、島の住人たちは時間の経過を「待合いどころ」と共に感じ取ることができます。



ユニバーサルデザインへの配慮

連続性のある伸びやかな空間

1FL(GL+100mm)の待合室までは、敷地境界線から緩やかにスロープで繋げることで段差を解消し、バリアフリーとします。また、屋内外をまたがるようにベンチを設えることで、誰でも気軽に休憩することのできる空間を周囲につくります。

効率的な維持管理への配慮

フラットなワルルーム空間

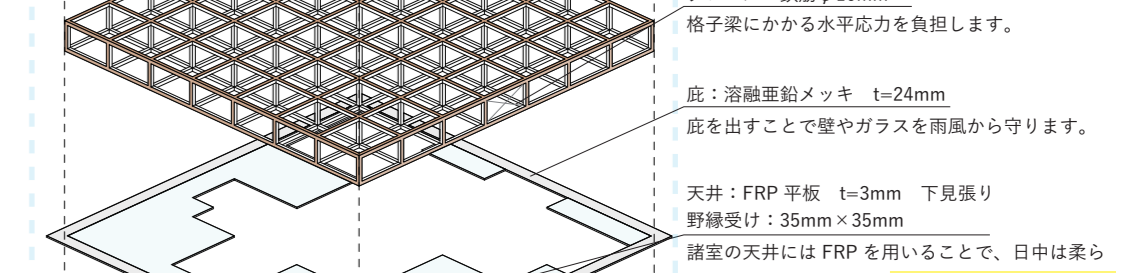
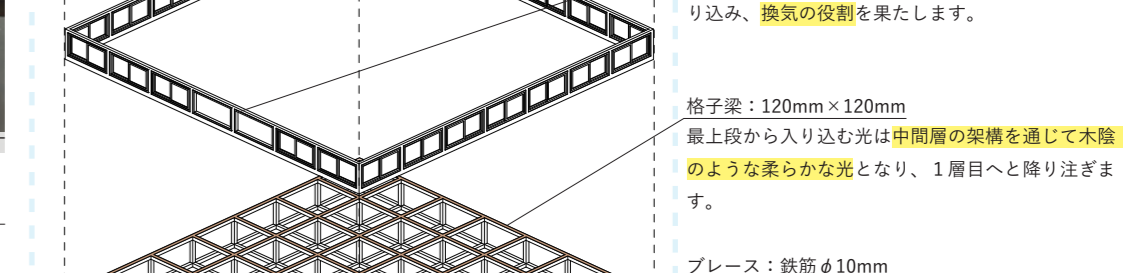
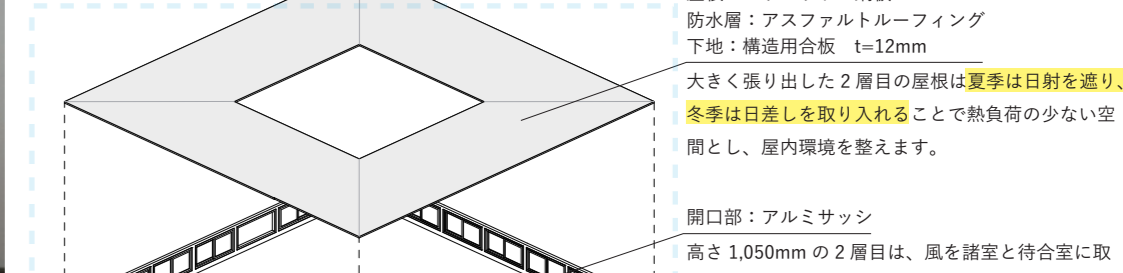
大きな待合室を中心とした配置計画にすることで諸室のどこからでも利用者の気配を感じることができ、管理が行き届きやすくなります。また、床は土間コンクリート金コテ仕上げにすることで、ゴミや埃の掃除などの手入れが容易になります。

脱炭素化への配慮

3層の構成による、明るく快適な空間

層：ガリバリウム鋼板 t=0.35
 防水層：アスファルトルーフィング
 下地：構造用合板 t=12mm

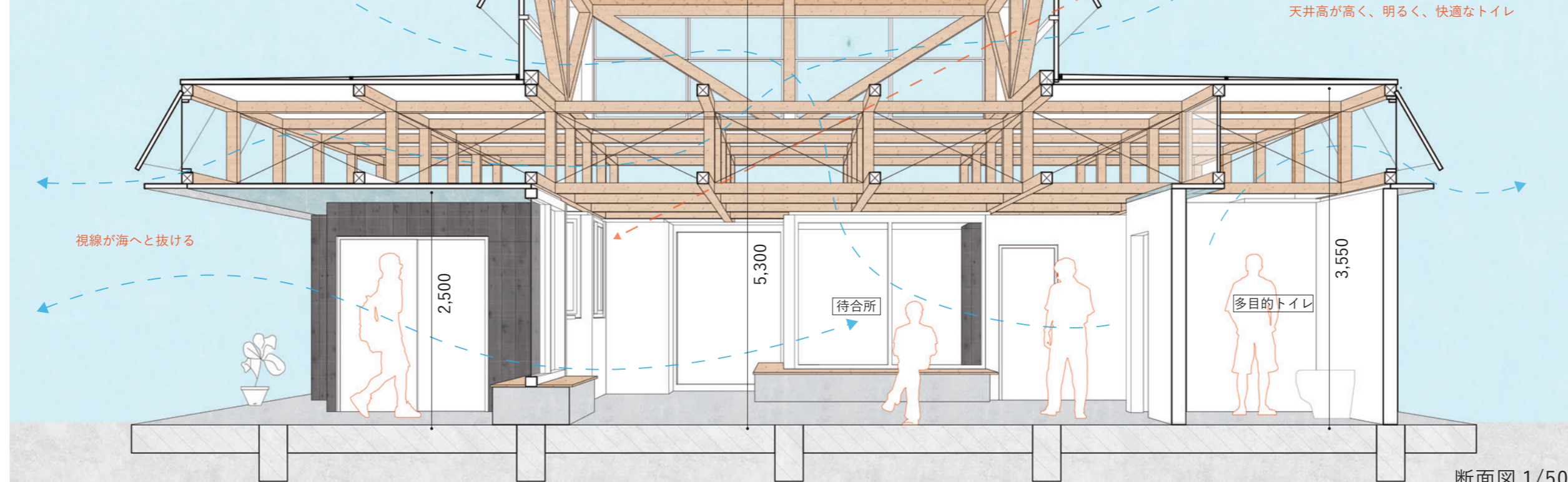
トラス：150mm×150mm
 ガラス張りの島上段からは常に安定した光が降り注ぐため、入口直前に頼らない採光が可能。段々の形状を利用し、温度差でできる熱だまりを排除できるため空間に頼らない自然採光が可能になります。



断面計画

瀬戸内の大きな環境を迎え入れる断面

人の居場所となる1層目、風を取り込む2層目、光を取り込む3層目の3層構成とすることで、緩やかな時間の流れとともに移ろう瀬戸内の大きな環境を感じながら時間を過ごすことのできる空間をつくります。



断面図 1/50